前口上

今回のテーマには「教養の・ある人・ない人」というタイトルを掲げてみました。別段、巫山戯（ふざけ）ている訳ではありません。それどころか、むしろ真面目に、しごく真っ当に、いわゆる「教養」（ひいては、教養教育）と私たちが向かい合おうとすれば、そこには自ずから「人」の視点を抜きにして、これを欠いていては成り立たない問題が存在しているであろうことを、このタイトルは訴えようとしています。もちろん、このような主張は当センターが、その「教養の森」の英語名に“Center for Human Enrichment”を宛がって以来、この10年ばかりの間に、何度も何度も、主張して参りました点に他なりませんが、どうやら昨今、世間で罷り通っております「教養」談義には、残念ながら、このような視点が完全に、とは行かないまでも、ほとんど抜け落ちてしまっているのではなかろうか、と危ぶまれる場面が少なくありません。もちろん、これは大学教育における教養教育についても同様で、そこには下手をすると、まったく「人」の視点を伴わない、これを忘却した所で空回りを続ける議論ばかりが、やたらと目に付き、目を引くようになって参りました。唯一の例外は、そのような私たちが一人の人間（すなわち、個人）として、とりわけ大学教育における教養教育の担当教員として、それでは一体、お前には「教養」が「ある」のか「ない」のかと、その返答を迫られました時に、そこに突然、私たちが普段とは違う、過敏なまでの反応を示し、私たちの内心を、穏やかならざるものにすることくらいではありますまいか。

例えば、このような事態は私たちが、知識が「ある」とか「ない」とか、あるいは常識が「ある」とか「ない」とか、このような物言いを致します折に、そこに伴われる感情とは、いささか（それとも、けっこう）違うものが含まれていますし、それは私たちが、このようにして何かを知（し＝識）っていることや、その際の、文字どおりの知識とは違う所で、この「教養」が捉えられていることの、分り易い証拠ではなかったでしょうか。現に、これが意識や認識となれば、私たちは日常、当たり前に生活をしておれば、これを携えていて当然と思い込んでいますし、これが学識や見識や博識となれば、今度は逆に特定の人が、それ相応の訓練や努力の果てに手に入れ、ようやく身に付けることの出来るものであり、これが「ある」とか「ない」とか言われても、それほど私たちは驚いたり、嘆いたりする訳ではありますまい。と言う訳で、今回は特別に、この『年報』初の企画として、本学の学生諸君に各学部と各学年とから参加して貰い、このような「教養」の呪縛を免れ、おそらく教員よりは数段、自由に「教養」（ひいては、教養教育）を捉え、これと向かい合っているであろう側の、率直な意見を聞き、これを一方で、かなり頭の凝り固まっている虞の強い、教員との共同制作（コラボレーション）という形で仕上げることに致しました。大学教育に、もし本当に教養教育が必要であるのなら、このような辺りから、もう一度、私たちはスタートを切る必要があるのではなかろうか、という単純至極な、原点回帰の取り組みでもあります。